



夜明け前、 私たちは立ち上がる。

作 鮎田直也(The Stone Age)
演出 大西弘記(TOKYOハンバーグ)

2018年5月16日(水)～20日(日) サンモールスタジオ

TOKYOハンバーグ+The Stone Ageフライアント合同企画 VOICE
サンモールスタジオ提携公演

「登場人物」

〈伊藤家〉

伊藤直美(いとうなおみ) 娘 ……永田涼香
伊藤洋(いとうひろし) 父 ……内谷正文
伊藤洋子(いとうようこ) 母 ……上田尋

〈直美の恋人〉

浦島健一(うらしまけんいち) ハマチ養殖 ……谷沢龍馬

〈直美の叔母 父の妹〉

岸ゆかり(きしゆかり) スナック経営 ……橘麦

〈直美の幼なじみ 御船夫妻の娘〉

御船なぎさ(みふねなぎさ) 小学校教師 ……野村咲

〈古和浦の漁業関係者〉

九鬼陽一郎(くきよういちろう) ハマチ養殖 ……荻野貴継

九鬼香織(くきかおり) 九鬼の妻 ……吉田由布子

御船勝(みふねまさる) 釣り船屋 ……宇鉄菊三

御船恵子(みふねけいこ) 御船の妻 ……竹井京子

〈古和浦の情報通〉

浅尾幸(あさおさち) 美容院経営 ……徳永梓

〈中立派〉

浜口博(はまぐちひろし) 三重県庁地域振興課 ……高須誠

〈原発推進の工作員〉

服部晃(はっとりあきら) 中部電力社員 ……小林大輔

三重県にあるリアス式海岸。芦浜地区。この地で37年間に渡って原発推進派と反対派の闘争は2000年の白紙撤回まで続いた。物語は芦浜地区の小さな漁師町・古和浦の住民たちに焦点を当てて、劣勢だった反対派住民たちが覚悟を決めて立ち上がるまでを描く。



舞台は前後二段になっていて、一段高い後方を伊藤家や民宿などの部屋として、舞台手前を浜辺や漁港など外でのシーンとする。

暗転とともに土をシャベルで掘る音が聞こえ始めてくる。その音がだんだん大きくなってー

ドンっと鈍い音がある。※男が土の穴に放り投げられる音

オープニング

明転。

舞台手前に50才代の男が目をつむって横たわっている。

※穴の中に放り投げられた

舞台後方には30才代の男が肩で息をしながら手前の男を見下ろしている。

浦島 はあはあはあ

この光景を上手端から緊張しながら見ている女がいる。男、女に気が付いて

浦島 何や？ 直美おったんか？

直美 うん、何しとん？

浦島 今から埋めるんさ

男が下の男めがけてシャベルで土を入れる。

直美 え、何を？

そこに新たに4人の男が現れる。

服部 浦島、どこまでやった？

浦島 ええもう穴の中に落としましたわ

服部 そしたら、みなさん手伝わってもらってもいいですか？

陽一郎 はい…(下を見下ろして)あとはもう埋めるだけですか？

浦島 そういことですか

博 ほんなら早いとこやっつてしまいましょうか

勝 夜が明けるまでにやらないとな

浦島 そういことですか

直美 なあ、何を埋めとるん？

男たち、下の男めがけてシャベルで土を入れていく。
そこに新たに6人の女がやってくる。

恵子 うちらも手伝うわ

浦島 ああ助かりますわ

浅尾 この土を穴の中に埋めてったらええんやんな？

浦島 はい

浅尾 (下を覗いて)ほな頑張ろか

直美 さっちゃん、穴の中には何があるん？

香織 私こついうの初めてなんですけど？

服部 見ててください。こんな風にしてもらったらいいですから

服部、女にシャベルの使い方を見せる。

香織 あっはい、わかりました

浦島 みなさん、夜が明けるまでに跡形もなく埋めたくてくださ

女たち、下の男めがけてシャベルで土を入れていく。

なぎさ　しゃあないもんな、こうなったら
ゆかり　そや、もうこうするしかないんや

洋子　直美、何しとるん、あんたもはよ手伝いないさ！

直美　えっ

ゆかり　あんた何ポツーとしとるん！

直美　そやから何を埋めとるんさ？

直美の声を無視して、みんな男を埋めていく。

浦島　直美、まだわかれへんの？

直美　わからん、何なん？

直美、恐る恐る穴に近付いて覗いてみる。

直美　もう埋まってるから何も見えへんやん

浦島　(笑って)うん、確かに何かわからへんな

直美　浦島さん、何を埋めたん？

浦島　直美のお父ちゃんや

直美　えっ！

暗転。

一場　4月

明転。

夜。舞台奥中央。伊藤家の居間。

下手側手前に娘・伊藤直美。奥に浦島健一が座っている。

向かいの上手側奥に母・伊藤洋子。手前に父・伊藤洋が

座っている。

洋子、直美と浦島の顔を交互に見て

洋子 (びっくりして) えっ？ ェィンズにヤッ？

直美 (声が小さい) うん

洋子 なあ。

直美 (少し声が大きくなる) ほやから付き合ってるんやっ…。(浦島を
見て) 浦島さんと

洋、驚いて直美を見る。

洋子 いつからー！

直美 (下を向いて) ひと月くらい前から

洋子 何なんさ、なんで今まで黙ってたんさ

直美 …(ちよっと言ってる)

洋子 直美

直美 反対されると思ったから

間。

洋子 お父さん

洋 …

洋子 びっくりしたな

洋 …

間。

洋、浦島をじっと見つめる。

洋子 どんな人連れてくるんかなって思ったったら、まさか浦島くんとか
はな

直美 お父ちゃんとお母ちゃんは前から知っとったらしいな、浦島さん
のいじ

洋子 そらおんなじ養殖やっとな人やでな

直美 うん

洋子 あんたらはどこで知り合ったん？

直美 食堂。浜好(はまよし)食堂

洋子 あんたの職場かん？

直美 うん

洋子 直美から？

直美 えっ

洋子 ほやからあんたから言ったん？

直美 そんなどっちでもええやん

洋子 前から気に入っとったん？

直美 …うん

洋子 へえー直美がな

直美 何

洋子 あのーあれかん？ たけしの元気が出るテレビの

直美 勇気を出して初めての告白？

洋子 そうそう

浦島 いや俺から付き合いたいって言ったんです

間。

そこに突然、黒電話の大きな呼び出し音が鳴る。

洋子 びょうしやう

洋 出てみろよ

洋子、電話に向かう。三人何となく洋子の姿を目で追う。

洋子 はい伊藤ですけど

しかし洋子が取ると電話は切れる。洋子、戻ってくる。

洋子 何なんさ、もう
直美 なっとしたん？

洋子 いやな、あんたらが来る前にも三回くらいかかってきてた、出たら切れたんさ

洋 あいつらやろ

洋子 あいつらって

洋 決まっとるやろ、賛成のもんしか、そんなことせえへんわ

洋子 ほやから何でそんなことするんさ

洋 何でって、嫌がらせ電話やねいか

洋子 えっ

洋 最近、あいつらそんなことしとるみたいやぞ

洋子 何なん？ それ

洋 もう電話の線抜いとけ

洋子 あかんさ

洋 何で

洋子 そんなんしたら、うちらが困るやんか

洋 こんな時間もう誰もかかってこようへんやねいか

洋子 ほやけどさ

洋 ええから抜いとけ

洋子、渋々電話の線を切るしべををする。
間。

洋子、浦島を見て

洋子 あっ、お茶出してなかったな、ごめんな

浦島 あっいや

洋 直美、ちよっと酒買ってきてくれ

浦島 あっ俺車で来とるんで
洋 俺が飲みたいんや

洋、急いで財布から千円札を直美に渡す。

洋 日本酒やったら、なんでもええから

直美 …

洋 ええからちよっと行ってきてくれ

直美 うん

直美、浦島を気にしながら立ち上がって外に出ていく。

洋 何しとん

洋子 えっ

洋 お前はお茶持ってきてくれ

洋子 …

洋 ええから持ってきてくれや

洋子 うん

洋子、台所に行く。

洋、洋子が行ったのを見届けて

洋 (小声で)浦島お前どいついっしょやねっ?

浦島 えっ

洋 直美が俺の娘やってわかって近付いたんか?

浦島 いやいや違いますよ

洋 目的は何や? 俺か?

浦島 何を言うとするんですか、俺はただ付き合ってますって挨拶に

洋 …

浦島 隠れてそんなことしてるんやっぴら

洋 …

浦島 当たり前やないですか

洋 …

浦島 何でそんなこと

洋 いや俺は信じられへんわ

洋子、お茶を持ってくる。

洋子 ほやけど浦島くとまたこんな形でしゃべれることになるとは

な

浦島 はい

洋子 ほんまにいつの間にか、南島町(なんとうちょう)言うか古和浦(こわうら)は夏(なつ)っ(つ)になつてったもんな

浦島 ええ

洋子 えっ? ちゅうことは浦島くん、考え方変わったってこと?

浦島 …

洋子 ああそれはそれ、これはこれか

浦島 あのー洋さん

洋 えっ

浦島 …

洋 何や?

浦島 すんません、今まで色々と面倒見てもろたのに

洋 …

浦島 俺が何で賛成になったんか、理由聞いてもらえませんか?

洋 そんなん別に聞きたないわ

浦島 …

洋 お前らの言うことは大体わかつてるし

洋子 もうそんな話より二人のこれからのこと考えよや

洋 何や? これからのことって

洋子 なあ浦島くん

浦島 …ええ

洋子 今日こんな風に来てくれたんは先のこともきえてくわゆるんやろ？ (笑って)結婚とか

浦島 …

洋子 お父さん、まあ難しいことは今日はもう置いていって

洋 お前はほんまにあほやな

洋子 何でや

洋 そのことを横に置いていって何を話すことがあるんじゃ…(浦島)はなあ？

浦島 洋さんの考えは変わっとらんのですか？

洋 はあ？

浦島 俺は古和浦が変われると思っとるんです

洋 …

浦島 原発ができれば

洋 そら古和は変わるやろな

浦島 いや悪くしたらんといってください。ほやけど今養殖してる連中はみんな困っとりますやんか。反対派はハマチの工サ代払うために借金重ねてるでしょ？

洋 ほやからって古和を中部電力に渡せってか

浦島 俺は洋さんが何でそこまでこだわっとるんか、わから入んです

洋 …

浦島 もう古和の漁師は賛成の方が多なったやないですか

洋 お前養殖やめてから、そんなことばかり考えとるんか

浦島 …

洋 今何しとるんや？

浦島 …

洋 ちゃんと働いとるんか？ そんなこと考えとる暇あったら

浦島 そんなことって、原発は古和にとって大事なことじゃないですか

洋 …

浦島 洋さん、何ですって反対しとるんですか

洋 お前にそんなん言っても意味ないやろ

浦島 洋さんとこも借金あるんでしょ

洋 やっぱりお前は俺が狙いなんやな

浦島 …

洋 直美もあほやな、こんな奴のダシにされて

洋子 お父さん、何でも疑うんはあかんのとちゃう？

洋 お前は何でもかんでも信じすぎるんじゃ

洋子 何がさ

洋 勉強会行ってから、急に安全やって言い出したやねいか

洋子 …

洋 あいつらの開く勉強会やぞ、そう言うに決まっとるやろ

ドアがガラガラ開く音。

入ってきたのは、直美と父の妹・岸ゆかり。

直美が酒を片手にゆかりを支えている。

ゆかりは酔っている様子。

洋子 何やん？ ゆかりちゃん、どうしたん？

直美 酒屋の前の電話ボックスで座り込んだ

洋 何じゃ、ゆかりお前酔うとるんか？

ゆかり あれ？ 浦島くんやん。何であんたがここにゐるん？

あっひょっとして考え変わったん？

浦島、立ち上がる。

浦島 すいません、今日は失礼します

直美 えっ

浦島 ごめん、まだ連絡する

浦島、出ていく。

直美 私もちよっと出てくる

直美、浦島の後を追って出ていく。

洋 何や突然、こんな時間に

ゆかり ほやから電話したわ、酒屋の電話ボックスで

洋子 えっ

ゆかり ほんなら何か全然うんともすんとも呼び出し音鳴らへんし

洋子 あっ

ゆかり まあもう近くまで来とるし、行ったらええかって思ったたら
直美と会おてさ

洋子 さっき電話の線抜いたからやに

ゆかり 何でそんなんするん？

洋子 いやさ、賛成のもんからの嫌がらせ電話がかかってきとったみた
いやどね

ゆかり 嫌がらせか

洋子 うん

ゆかり ああ、うちの電話もたいして変わらへんかも

間。

ゆかり お兄ちゃん

洋 何や？

ゆかり もうあかんわ

洋 ほやから何がね？

ゆかり お金貸してくれへんかな、百万へらい

洋 なっとしたんや？

ゆかり 店つぶれそうなんさ、うちのスナック

洋子 何でさっ？

ゆかり あたしあほやから、(笑って)賛成の連中追い出したらお客さん
来うへんようになってしもた

洋子 何それ

ゆかり お兄ちゃん、うちもうあかんかも知れやんわ

舞台後方の居間の照明が落ちる。

※居間の三人は溶暗の中、セリフなしの静かな芝居は続く。

奥の照明が落ちたと同時に手前の照明が明るくなる。

手前はニラハマ展望台になる。

海が近いことを表す霧笛の音。

下手から直美が歩いてくる。

直美 風強いな

続いて浦島も歩いてくる。

直美 夜やで展望台からは何も見えへんし

浦島 景色なんか今どうでもええって

直美 …何て言うてたん？ お父ちゃん

浦島 信じられへんって

直美 何が？

浦島 直美ちゃんと付き合ってること

直美 …

浦島 何か裏があるんやろって

直美 裏？

間。

浦島 直美ちゃん

直美 何？

浦島 やっぱり色々難しいわ

直美 何がさ？

浦島 このまま付き合っていくこと

直美 …何で？

浦島 お父さんが許してくれへんし

直美、しゃがみ込む。

直美 どうしたらええんやろ

浦島 (笑って)早よ原発出来上がったらええのにな

直美 えっ

浦島 そうなったら、お父さんも俺らのこと反対する理由がなくなるや

ろ

直美 そうやけど

浦島 直美ちゃん、自分で言ったやん

直美 なにが？

浦島 原発ができへん事と俺との結婚。どっちかひとつ取るんやったら、俺との結婚をとるって

直美 言うとした

浦島 ほやから直美ちゃんも協力してさ

直美 えっ

浦島 お父さんの考えをひっくり返るよろこび

直美 そんなんでお父ちゃんは変わらんとおももん

浦島 そうか

直美 うん

浦島 ほんなら、もう別れよか

長い間。

霧笛の音が大きくなる。

直美N (日記) 1994年4月15日 初めて会った時、浦島さんがそんなことを考えてる人やなんて思ってもみいひんかった。最初から、私が夢見てた未来なんかどこにもなかった。未来をチラつかされて、私は初めて人にだまされた

暗転。

二場 8月

明転。

昼。舞台中央奥。伊藤家の居間。

夏を表す蝉の声が鳴り響く。

上手側に直美。下手側に浅尾幸と御船なぎさが座り、机の上でハガキに何かを書いている。

浅尾 あんたは次々に夢叶えていくな

なぎさ えっ

浅尾 学校の先生も子供の頃からなりたいてって言うとしたしな

なぎさ ああー言うとしたなあ

浅尾 ほんでどこの人なん？

なぎさ 大阪の人

浅尾 大阪かあー

なぎさ うん。おんなじ小学校の先生

浅尾 もう日取りは決まっとるん？

なぎさ 来年の6月

浅尾 めっちゃジューンブライドやん、ジューンブライドー！

なぎさ (喜んで)二回も言わんといいな

浅尾 だってほやろ

なぎさ (喜んでうん、ほんま24才でジューンブライドは私の夢やったから。うん夢やったから)

浅尾 二回も言うな

直美、なぎさをじっと見ている。

浅尾 直美ちゃんはどうなん？ その辺

直美 何も無いよ、あたしは

浅尾 春頃に食堂のお客さんで気になる人おるって言うとなんか

直美 …

浅尾 言うとなんか？ よう目が合ってる

なぎさ えっ漁師？

浅尾 何か背高くてハマチ養殖してる人とちゃったっけ？

直美 もう食堂やめたからそんなこと忘れたった

浅尾 …

直美 さっちゃん、時間大丈夫なん？

浅尾 何がさ？

直美 美容院さ

浅尾 ああ

直美 予約のお客さん来るんちゃうん？

浅尾 お客さん来るん1時時から、もうちょっと頑張るわ

直美 なぎさももうええで。あとはあたしが書いてくから

なぎさ 何でそんな言うんさ、私も手伝うんか

直美 …(そんないは答えず新しいハガキに書き始める)

浅尾、直美を見ている。

3人、再び書き始める。

なぎさ、書くのをやめて

なぎさ さっちゃん

浅尾 何？

なぎさ (心配そうに小声で) ちよっとやせた？

浅尾 何や突然

なぎさ いやこの前と比べて、そんな気がしたからさ

浅尾 この前？

なぎさ 今年の正月。私が帰ってきた時さ

浅尾 そやろか

なぎさ さっちゃんとの美容院、お客さん減ってるん？

浅尾 誰がそんなこと言うたん？

なぎさ 私のお母さんが言うったに

浅尾 ああこないだあんたこのお母ちゃんにあたしがグチったで
か

なぎさ 減っとんの？

浅尾 うん減ってるとる、(笑って)日に日にな

なぎさ そうなんや・・・

浅尾 今まで来てくれとった漁師の奥さん連中らが知らんうちに賛成
に手を上げてってな

なぎさ、心配そうに浅尾を見ている。

直美は書き続けている。

なぎさ 風船は何個用意してるん？

直美 千個

なぎさ 千個かあー直美の分はあと何枚ぐらい書かなあかんの？

直美 わからんけど、まだまだある

なぎさ 大変やな。間に合う？

直美 (カリカリして) ほやから後はあたしがやっつてくって

間。

浅尾 (空気を交えようとして)はぁー今さらやけど手書きしよう、あたしつくづく習字とか習ったたら良かったなって思うわ

なぎさ でもそんな上手い下手関係ないんちゃう。大事なんは気持ちやでさ。そういう手書きやからこそ、ここまで風船届いたよって返信してくれる人があるんを信じるしかないやん

浅尾 そやな、それを信じ、あっ…

なぎさ なっとしたん？

浅尾 間違えた。放射能の能を熊って書いたった

なぎさ、ハガキを見て

なぎさ (笑って)ほんまや、放射熊(ほうしゃぐま)って何なん？

浅尾 (ハガキを手に)放射熊(ほうしゃぐま)がここまで飛んでくるというじじいです

なぎさ (笑って)何それ、どんな熊なんよ

浅尾 あぁー疲れたーちよっとタンマ

浅尾、寝転がる。

なぎさ あぁー私も気持ち込めすぎた

なぎさも寝転がる。

直美は二人を見るが再び書き始める。

なぎさ (急に起き上がり)あかん！ほんまに寝たるわ

なぎさ、何かを思いついて立ち上がらびじりかへ行へ。

浅尾 じじい行くん？

なぎさ ちよっとお日さん浴びたいから散歩してくるわ

浅尾 (寝ながら)ほんまは彼氏に電話しに行くんやろ?
なぎさ バした?

なぎさ、ヨシヨシ。

浅尾 (寝ながら)あんた何カリカリしてん?

直美 :

浅尾 気分乗らへんのやったら、無理してやらんでええやん
直美 そんなことないって

間。

直美 さっちゃん

浅尾 何?

直美 さっちゃんはなんぼお金をもろたとしても賛成にはならへん?

浅尾 (笑いながら)起き上がってなんぼぐらいもらえるん?

直美 例えば三千万ぐらい

浅尾 三千万! 何でまたそんな具体的なん

直美 お母ちゃんが言うと思った、お父ちゃんを漁業組合の理事から辞め
させたら三千万もらえるらしいって

浅尾 何それ?

直美 三千万ってどれぐらいの価値なんやろ

浅尾 そら新しい商売始めるぐらいのお金にはなるや

直美 最近、お父ちゃんが穴の中に埋められる夢ばかり見るんや

浅尾 誰にさ?

直美 : 男の人

浅尾 誰それ?

直美 さあー全然知らん男の人

浅尾 気色悪いな

直美 (笑って)でもその夢ではな、さっちゃんもお父ちゃんを埋めとん

んやに

浅尾 (笑って) そうかあー埋めとるかあー

直美 夢の中のさっちゃんもお金欲しかったのかな

浅尾 そりゃそうやわ。そんだけお金あったらあたしも大阪に出て新しい店出せるでな

ドアがガラガラ開く音。

九鬼香織が三十枚ぐらいのハガキを手にやってくる

香織 こんにちは

直美 (喜んで) あっ香織さん書いてくれたんですか！

香織 (机の上にハガキを置いて) はい、私も頑張ったよ

直美 あっありがとうございます

浅尾 香織さんにも手伝ってもらったん

直美 あっ…うん

香織 また新しいのもらって帰ろうか

直美 いいですよ、こんだけ書いてもらったら十分です。あとは

あたしがやっておきますから

香織 でも大変でしょ？

直美 いやいや、あとはあたしが書かなあかん分ですから

浅尾、香織が書いた字を見て

浅尾 香織さん字きれいですねえー

香織 えっ

浅尾 やっはり都会の人の字って感じですね

香織 何ですか、それ

ドアがガラガラ開く音。

浅尾 ここはほんまぎょうさん人来るなあ

御船恵子が遠慮しないで居間に入ってくる。

直美 なぎさなら、さっき散歩に行きましたけど

恵子 あれ、なぎさきとんの？

直美 はい、何かありました？

恵子 いや…洋さんおるかな？

直美 今日は宮城に行っとるけど

恵子 宮城？

直美 はい、女川に九鬼さんとゆかりちゃんと

恵子 女川？ ああ原発みに行っとるってこと？

直美 はい。どうしましたん？

恵子 いや、うちの人のことなんやけどな

直美 はい

恵子 近所の人から背広姿の男といっしょに歩いとったって聞いたで

さ

直美 背広姿

浅尾 中電の作業員とちゃう？

恵子 多分な、ちよっとうちあの人がいきそうなとこあたってみるわ…

あんなぎさにはこのこと言わんといてな

直美 あっはい

恵子、急いで出ていく。

香織 気になってたんですけど

浅尾 えっ

香織 だんなが最近御船さんのこと言うとったから

浅尾 なんて言うてたんですか？

香織 御船さんはもう賛成に回るかも知れないって

浅尾 えっそうなんですか

香織 そう言っていましたけど

浅尾 (独り言)お金に困っとんかな？

香織 何かこないだの時化(しけ)で釣り堀のいかだが壊れたらしくて

浅尾 そんな商売できんやん

香織 ええ

浅尾 それやったら、その情報、中電の作業員やったら知っとるゆるな

直美 いややな

浅尾 何が

直美 なぎさんとこが賛成になったら、めったに会ええへんけど、あの

子ともう口利けへんようになるんやろなあ

浅尾 いやまだそうと決まったわけちゃうやん

直美 …

香織 ホント今年に入ってそういうこと多くなりましたよね

浅尾 ええ、今古和の漁師はほんまお金で釣られとるみたいですから

香織 (笑って)あっ何かうまい表現ですね

浅尾 えっ…(気付いて)ああ

香織 お金に困っとる漁師からすれば切実なんでしょうけど

浅尾 香織さんとは困ってないんですか？

香織 私のところも余裕はないですよ

浅尾 (苦笑して)同情するならカネをくれ！って話ですね

香織 ああ私もあのドラマ観るたびに古和のこと言われるのになって

思っちゃう

浅尾 あっ！

直美 えっ

浅尾 時間忘れてた。ほんならあたし店行くわ。直美ちゃん、ハガキ残りの分頼むで

浅尾、急いで出て行く。

香織 じゃあ私も工場に行ってきます

直美 えっ今日は休みじゃないんですか

香織 だったんだけど、魚さばく人が足りないみたいで…(出て行きかける)それに休日手当ももらえないから

直美 香織さん

香織 うん？

直美 香織さんも賛成に回るってことあるんですか？

香織 えっ…(笑って)ないない

直美 良かった

香織 そんなことするべらいなら、古和に嫁いできてないから

直美 あっそうですよね

香織 じゃあまた明日工場だね

香織、出て行く。

直美はハガキにメッセージを書き始める。

下手から、洋に続いてゆかりと九鬼陽一郎が歩いてくる。

舞台手前は宮城県・女川原発近くの浜辺になる。

波の音。

ゆかり 香織さんって古和に来てどんだけになるん？

陽一郎 ちようど一年べらいですかね

ゆかり そうなんや

陽一郎 何ですか？

ゆかり えらい時に古和に来たもんやなって思ってた

陽一郎 …ええ

ゆかり (笑って)今頃嫁に来て失敗したなって思っとるかもな

陽一郎 …

洋 お前はいらんこと言わんでええんじや

ゆかり いや心配してるんやに

陽一郎 大丈夫ですよ。香織もいっしょに闘っていくって古和に来て

くれたんですから

洋 九鬼

陽一郎 はい

洋 どうしてもカネ欲しなったら俺を刺したらええから

陽一郎 (笑って)三千万ですか

ゆかり ちよっとやめてさ、そんな話

陽一郎 洋さんは怖ないんですか？

洋 さっき女川の漁師の人が言うところたやろ、ええと思って原発に賛成
したけど、まだできてないんやったら命かけて反対せなあかんって

陽一郎 言うてましたね

洋 そういうことや

ゆかり ほんまはお兄ちゃんも怖いんやろ？

洋 ほやで、お前はいらんこと言っな

洋、海を見ている。

ゆかり なっとしたん？

洋 うん？

ゆかり なんなんさもう

陽一郎 どれぐらい前なんですか？ 昔カツオ船に乗ってこの女川に
来とったんは？

ゆかり あの頃、うちもめっちゃカツオ船に乗ってたわ

洋 ああお前、何で女の人は乗れへんのさってうるさかったもんな

ゆかり うち、いくつぐらいやったやろ？

洋 ゆかりはまだ高校生やったんちゃうか

ゆかり ああーうちがめっちゃ可愛かった頃か

陽一郎 (笑って)よっ言いますわ

ゆかり ちゃうか

洋 ほやで…25年ぐらい前になるんか、ここに来たんは
陽一郎 変わりました？

洋 うん、女川がこんな寂しい町になっとなるとは思いもせんかったわ
ゆかり 全然ちゃったん？ 昔は

洋 うん、もっと活気ある町やった

陽一郎 女川は原発できて発展しとるっていう中電の話はウソやった
ってことですよね？

ゆかり そらそうやろ、漁に出とる人は少ないし、磯焼けして海藻なん
か生えてなかったやん！ あんなも貝も魚も育てへんで

洋 九鬼、見に来てよかったやろ？

陽一郎 …ええ

ゆかり 九鬼くんら世代がこれからの古和を守ってくれなあかんでな

陽一郎 そんなプレッシャーかけんといってくださいよ

ゆかり あんたは浦島くんみたいになったらあかんで

陽一郎 何で急にあいつのこと出すんですか

ゆかり ごめんごめん、あんたとは全然ちゃうわな

洋、下手にいへ。

洋 もう帰るぞ

ゆかりと陽一郎も下手にいへ。

舞台奥中央。なぎさ、戻ってくる。

なぎさ あっ、さっちゃんもう仕事行ったんや

直美 うん、電話代めっちゃかかったやろ

なぎさ テレホンカード3枚も使ったった。私も携帯電話買おかな

直美 (興味を示さずハガキを書きながら)うん

問。

直美が書いているのを見て、なぎさもハガキ作業を始める。

直美 (書き始めたなぎさに) あっありがとう

舞台奥の下手は民宿の一室になる。

半袖白シャツ姿の服部晃が下手から出てくる。

服部 (昔のケータイで電話している) ええはいはい…えっあっすみませ
んちよっとこの民宿電波悪いんで…(色々場所を変える) 浜好の食堂
に出入りしてる…了解です。明日ちよっと探り入れてみます

服部、電話を切ってノートに何かを書き込んでいる。

なぎさ 直美

直美 何？

なぎさ 私らが芦浜にウミガメ見に行った時って幾しくらいやっけ？

直美 ああ…(書くのを止めて)

なぎさ 子供の頃、見に行ったやん。山越えてめっちゃ歩いて行ったや
ん

直美 錦のおじいちゃん家に泊まった時やな

なぎさ 今年はもう産卵の時期終わったやろうけど、来年見に行けたら

なって思ってた

直美 …ああ彼氏と

なぎさ うん

直美 ウミガメかあ

なぎさ うん

直美 久しぶりに思い出したわ

なぎさ そやろ？

直美 うん

なぎさ あのとき、大人がさ、ここに原発建ったら、ウミガメが来れへ
んようになるんやぞ言うとったん覚えてる？

直美 …うん言うとった

なぎさ 大丈夫かな

直美 …うん

なぎさ 来年、直美もいっしょに行きな

直美 うん…(ハガキを書き始める)

なぎさ、直美がそれ以上何も話さないで黙ってハガキに
メッセージを書き続けているので、同じように書き始める。
そこに背広姿の浦島が下手から入ってくる。

浦島 服部さん

服部 おおー背広姿かよ！ 何？ 今日から

浦島 (嬉しそうに) ええ今朝名刺もらいました

服部 今までどこに行ってたの？

浦島 (嬉しそうに) 船着き場です

服部 (期待して) 何？

浦島 こないだ話してた釣り船の御船さん連れてきました

服部 ホントかよ！

浦島 ええですか？ 入ってもらっても

服部 ああうんうん

浦島 あっ御船さん入ってください

御船勝、遠慮気味に入ってくる。

服部 お久しぶりです

御船 ええ

服部 どうされたんですか？

御船 ええ…ちよっと、ご相談が

服部 あっそうですか、まあまあ座ってください

勝 すみません(座る)

浦島 (横に座る)

服部 何かこの間の時化で釣り堀のいかだ壊れたらしいですね？

勝 えっ

服部 ああその辺は浦島から聞いていましたから

勝 あっはい

服部 困ってるんですか？

勝 ええ

服部 そりゃそうですよね。いかだ壊れたら釣り船の商売できないですからね

勝 ええ

服部 だったら御船さんの民宿に泊まる客も減ってるでしょ？

勝 ええ…まああと娘の結婚も決まりまして、ちっとは嫁入り道具を持たせてやりたいと思います

服部 えっ…それはそれはおめでとじいじゃないですか

勝 あっありがとうございます

服部 …(勝をしっかき見ている)いいですよ、お金のことは

勝 すみません、この前は服部さんに失礼なこと言って

服部 いやいやこっちはそんなこと慣れてるんで…でも御船さん

勝 はい

服部 このことは奥さんに言ってるんですか？

勝 …いえ

服部 いいんですか？ もめたりしないですか？

勝 …

服部 御船さんは婿養子だったんですね？

勝 …(その情報にびっぴりする)

服部 いや私たちのところには組合員のそういう情報は回ってきませんから…(笑って)でも娘さんが結婚することまでは知りませんでした

けいね

勝 (嬉しそうに頭をかきながら)あつまあ結婚決まったのは昨日ですから。娘が彼氏といっしょに挨拶来まして

服部 そんな大事な時期に奥さんともめたりしないで下さいよ

勝 いえ嫁もわかってくれると思います

服部 じゃあ諸々の話は飲みながらしましょうか

勝 あっ：私あんまり持ち合わせが

浦島 御船さん、お金のことは心配せんでもええですから

勝 えっ

服部 (笑って) いやいや浦島のカネじゃなくて会社のカネですから

浦島 どの店に行きますか？

服部 (半笑いで) スナックゆかりに行ってみるか

浦島 (ノッて) 行きましょか、久しぶりに

服部 (わざと方言で) あほっ行けるかさ！

服部と浦島、笑う。

服部と浦島と勝は下手に出て行く。

照明、夕方になる。

洋子が下手から帰ってくる。

洋子 あっなぎさちゃんきとったん？

なぎさ あっはい

直美 でも今日の夜には大阪に戻るんやって

洋子 えらい早いな。忙しいんかん？ 先生の仕事

なぎさ まあ夏休みや言うても色々なんやかんやと

直美 なぎさ、来年の6月に結婚するんさ

洋子 えっー

なぎさ あっはい

洋子 へえーなぎさちゃんも結婚か

なぎさ はい

洋子 大阪の人？

なぎさ はい、おんなじ小学校の先生です

洋子 あんたもはよええ人見つけないさ

直美 …おじいちゃんどんな感じやった？

洋子 うん元気やったよ、退院したらまた漁に出たいって

直美 元気になって良かったな

洋子 ほやけどまだ古和のこと、どつたらこつたら言っとった

直美 そうなんや

なぎさ (空気を読んで) あっ私ぼちぼち帰るわ

直美 あっごめんな、手伝ってもうて

なぎさ ううん、私はこんなべらいしかでき入んから

直美 なぎさ

なぎさ うん？

直美 今度帰ってくるんはもう来年の正月か

なぎさ …大事な時やのに何も力になれんでごめんな

直美 ううん

なぎさ 風船、大阪まで飛ばしてな

なぎさ、下手から出ていく。

洋子、ハガキを手にとって

洋子 (ハガキを見ながら) おじいちゃんはやっぱり錦の人なんやなあー
って思ったわ

直美 また言うとったん？

洋子 うん…(ハガキを置いて) もう古和も賛成に回った方がええやろっ

て

直美 ほやけどお金より何より、もし事故が起こったらって話やもんな

洋子 まあそこやわな…中電はその辺大丈夫やって言うところけどな

直美 ほんまに大丈夫なんかな

洋子 徹底的に安全管理するんやって

直美 お母ちゃんは今どっちの考えなん？

洋子 うちの原発よりお父ちゃんの安全の方が大事やな

直美 うん

洋子 ほやで正直賛成でもええと思っとる

直美 …

洋子 あんたも反対活動するんはええけど…

直美 何？

洋子 はよええ人見つけて、古和から出ていけたらええのに

直美 …

洋子 お母ちゃん、ちょっと組合行ってくるわ

直美 何しに？

洋子 ちょっと、うちの借金なんぼあるんか確認したいから

洋子、下手から出ていく。

直美、机の上にあるいくつかの色とりどりの風船から
一つ取って、膨らます。

直美 …(膨らんだ風船を見つめる)

そして、つまんでいた口を離す。しばらくでいく風船。

照明、夕方から夜に変わっていく。

ドアがガラガラ開く音。

浜口 こんにちは

背広姿でメガネをかけた浜口博が下手から入ってくる。

直美 あっ

浜口 浜口です。(笑顔で)覚えてるかな？

直美 あっ久しぶりです…あっお父ちゃん、ちょっと出かけとってもうすぐ帰ってくるよ思い出ますけど

浜口 あっそう…何？ 漁にでも出るんか？

直美 いや女川に行っつて

浜口 何？ 原発見に行っとるん？

直美 はい

浜口 あのーあれか、中電が連れてってくれるバスでか？

直美 いや自分らで

浜口 えっ自分らで？

直美 何か中電に連れて行かれたら、向こうの都合ええことしか言わへんからって

浜口 (笑って) まあそれはそうやな…そうかあー電話してからにしたらよかったな

直美 …

浜口 いや出張で久しぶりにこっちの方に来たからさ

直美 あっそうなんですか

浜口 お父ちゃんどうしとるかなあって思ってた

直美 あっ何やったら、家で待っててもらってもええですよ

浜口 ほんまに？

直美 あっ私お茶入れます

直美、台所へ行く。

浜口 おおきに

浜口、座る。

机の上のハガキを見つけてメッセージを読んでいる。

直美、お茶を運んでくる。

浜口 これあれ？ このハガキを風船にくくりつけて飛ばすんや

直美 あっはい

浜口 ええアイディアやな。これ直美ちゃんが

直美 いえいえ近所の美容師さんが

ドアがガラガラ開く音。

洋が下手から帰ってくる。

洋 (喜んで) おおー何やまた！

浜口 伊藤久しぶりやな

洋 何なん？ 津から来たんか？

浜口 そや、上から古和に行って色々住民の声聞いて来いって言われて
な

洋 何やそれ

浜口 俺、今県庁で地域振興課ってところにおるんや

洋 地域振興課言うたら、お前がやりたいって言うってた仕事やねい
か？

浜口 そや、この春から希望叶ってや

洋 ほうか、それは良かったな

浜口 どうなん？ 最近

洋 どうもこうもあるか

浜口 ハマチが暴落し続けとるらしいな

洋 ああ

浜口 まだあの影響が続いてとるんやな

洋 まあな

浜口 ほやけどあれはもうテレビのヤラセって発覚したんやろ？

洋 それでもな

浜口 まああんだけ芦浜の養殖ハマチは薬漬けって報道されたらな。お

まけに全国の新聞にも報道されたしな

洋 (笑って) ほやから今ほんまに若い漁師は賛成に回ってとるわ

直美 あたし何か買おてこよか

洋 あっそうやな

浜口 ああ何もいらんで、あんまり時間もないし

洋 そうなんか

浜口 何やかんやとな…あっ女川行っとったんやって？

洋 おお、古和に住んどる若い漁師とゆかりとな

浜口 ゆかりちゃん元気か？

洋 うん、あいつは相変わらずさ

浜口 再婚は？

洋 ああもうせんのとちゃうかな

浜口 もう何年になるんや

洋 …7年ぐらいか

浜口 ほんま漁師は船底一枚で支えられとるだけやでな

洋 ええだんなやったけどな

浜口 ゆかりちゃんの店は繁盛しとるんか？

洋 うん、それがちょっとな

浜口 うん？ 店がなっとしたん？

洋 賛成のもん追い出してから、客がさっぱりみたいでさ

浜口 大丈夫か？

洋 うん、スナックやいうてもさ、あの店はゆかりがうちのオカンから

譲り受けた店やもんで何とかして守りたいんやけどな

浜口 そらそやな

浜口の携帯電話が鳴る音。

浜口 あっちょっとすまん…はいもしもし…あっちょっと待って下さい。電波悪いんで…アンテナを立てて色々移動してえっ今からですか？ …ああそうですか、わかりました

浜口、携帯電話を切る。

浜口 伊藤すまん、ちょっと仕事入ってしもたわ

洋 えっ？ 役人も大変やな

浜口 携帯電話持たされてから、こんな多ななってな

洋 なるほどな、そういうこともあるんやな

浜口 俺また古和に来ることもあるから、そんな時連絡するわ
洋 浜口、何かええ知恵あったら貸してくれ

浜口 そやな、何かしらお前の力になれること考えとくわ

浜口、下手から出ていく。

直美 女川どうやったん？

洋 ああ行ってよかったわ。お前もいっしょに連れて行ったら良かったわ

直美 ハガキ書かなあかんかったし

洋 もう全部書いたんか？

直美 まだある

洋 俺も手伝ったろか

直美 ええよ、これは女の人らでやるもんやから

洋 お前も反対集会とか行くようになって、力入ってきたな

直美 そうかな

洋 えっ

直美 お父ちゃん

洋 なんや

直美 来年の夏までは大丈夫かな？

洋 何が

直美 …あたしらの町

洋 あほっ来年どころかずっと大丈夫に決まっとるやろ

香織と陽一郎が上手から現れて、上手奥にいく。

舞台奥上手は九鬼家の居間になる。

陽一郎 えっ

香織 うん、まだわかんないけどね

陽一郎 そうかあー御船さん、賛成に回ったんか

香織 でも恵子さんって、ずっと地元の人なんでしょ？

陽一郎 うん、あそこは代々釣り船屋みたいやからな

香織 じゃあ恵子さんは反対するでしょうね

陽一郎 夫婦で考えが違ってきたら、ややこしいわな

洋 ほんまあいつはどっちつかずやな

直美 …

洋 そら、おじいさんはそう言うやろ、錦の人は30年前から賛成なんやから

直美 まあおじいちゃんはあたしらのこと心配してくれとるんやって

洋 心配って、カネのことやろ

直美 …うん

洋 そんなどうにでもなるわ、俺ら家族べらい

直美 お金はまああれとしても、お母ちゃんはお父ちゃんのこと心配しとるんやって

洋 …

直美 あたしもあんな話聞いて、ビクビクしとるし

洋 (笑って)何やお前ら、賛成に回れって言いたいんか

直美 いやそんなこと言うてへんやん

洋 わかっとるよ、お前らが心配しとるんは

直美 うん

洋 ほやけど、俺はそんなことで変わらへんから

直美 …

洋 反対するってことはそういらうことやろ

恵子と洋子が下手から現れて、下手奥にいく。

舞台奥下手は御船家の居間になる。

恵子 そうかあー

洋子 わかってくれる？

恵子 わかるさ、うちの人も口数少ないで何考えとるかわからんし

洋子 ほんで、すぐあたしのこと、お前はどっちかまずやからって言うてくるんさ

恵子 そんなだけ洋子さんが柔軟やってことやんな

洋子 まあ…(笑って)ええように言ったらな

恵子 いやいやほんまのことやに…それにしても、うちの人遅いな

洋子 あっごめんな。えらいええ時間になっとるわ

恵子 いやそれはええさ

洋子 ああー御船さんと久しぶりにしゃべったら、ええ気分転換になっ
たわ

陽一郎 ほやからどうしてもお金欲しかったら、俺を刺せって

香織 何それ？

陽一郎 ほんまあの人がおらんかったらもう終わっとったやろな

洋子、下手から出て行く。

香織 そんな懸賞金かかってるなら、賛成派は何とか洋さんを理事から

下ろそうとするよね

陽一郎 うん、中電の作業員は必死になってくるやろうな

香織 直美ちゃんも洋子さんも大変ね

そこに勝が下手から帰ってへる。

恵子 うん、なぎさはもう大阪に帰ったわ

勝 …そうか

恵子 中電の人に会(お)うてたん？

勝 会ってた

恵子 作業員？

勝 ああそう言われてるのかな

恵子 何か変なことされたん？

勝 (笑って)いやそんな人たちじゃないから

恵子 …

勝 何て言うかさ

恵子 うん

勝 お金いるだろ？

恵子 まあ、いかだ直さんとあかんからな

勝 …うん

恵子 そらお金欲しいけど…もううちら二人なんやし切り詰めたら何とかやっついていけるに

勝 俺らのことはいいんだよ

恵子 …

勝 なぎさにまとまったお金持たせてやりたいしや

そこに洋子が下手から帰ってくる。

恵子 そうちゃうかなとは思ってたけど

勝 …

恵子 こんなん言うたら、あれやけどや

勝 うん

恵子 あんたは元々古和の人とちゃうから、何でうちが△キになっとるか不思議なとちゃう？

勝 いや俺もこの町で30年は住んでるから、わかんないことはないよ

洋子 御船さんとはそんな話はしてないに

洋子 …

洋子 何であたしが中電の作業員みたいなことしなあかんのや

洋 ほやったらええけど

洋子 そんなん言い出したら、ほんまにしゃべれる人限られてくるやん

洋 しゃあないやろ

洋子 しゃあないって

洋 …

洋子 (怒って)いつまでこんなん続くんや！

洋 …

服部と浦島が下手から現れる。
場所は古和浦漁港。
霧笛の音。

服部 歩いてたら、酔い冷めてきちやったよ

浦島 あっ俺はあんま飲んでないんで

服部 お前が養殖してたいけすってどの辺にあったの？

浦島 …(海を見ている)

恵子 やっぱり、うちは原発の町にされるんはイヤやに

勝 …

恵子 事故が100パーセント起こらんとしても、町が壊されていく
んがイヤや

間。

恵子 (苦笑して)何かそんな風に言ったら、ただのわがままみたいやな

勝 …

恵子 ほやかから言うて、なまきまのこと考えたら、なっとしたらええんか、
わからんようになってったわ

服部 でも浦島、お前ホントよく御船さん崩したよな

浦島 あっ前から知り合いやったんで、警戒されやんと話してくれただ
けですよ

服部 いやお前向いてるよ、(自虐的に笑って)作業員の仕事

浦島 その言い方やめて下さいよ

香織 嫌がらせ電話？

陽一郎 何か洋さんとこに春頃からかかってきてるんやって

香織 そういうのも？

陽一郎 うん、多分中電の作業員が裏で操ってるんやろな

服部 風船プロジェクトって、いつ飛ばすんだっけ？

浦島 来週ぐらいとちやいますか

服部 そこに来る人は反対派ってことだよな？

浦島 そうなりますね

服部 改めて、どんな漁師が来てるかチェックしておかないとな

浦島 ちよっと俺気になっとる人がおるんです

服部 誰？

浦島 おんなじ養殖仲間やった九鬼さんという人なんですけど

服部 古和浦の人？

浦島 ええ俺が漁師やめる時、その人からさんざん嫌味言われたんです

服部 ホントはその人も漁師やめたかったんじゃないの？

浦島 …

服部 えっ

浦島 はい、そんな気がしてるとです

服部と浦島、九鬼家をしばらく見た後、下手から出ていく。

洋子 いやいやあんたは三千万で狙われとるんやで

洋 ほやで反対から下りろってか

洋子 うちは心配しとんの！

洋 極端な話、俺は最後の一人になっても反対や

直美 えっ

直美、洋をじっと見ている。

直美 N (日記) 1994年8月13日。お父ちゃんとお母ちゃんの考えは真っ二つに分かれてしまった。私はお父ちゃんが埋められていく夢に近付いてる気がした。

※暗転

三場 11月

朝。舞台奥中央。

漁港に近いことを表す鳥の声や羽ばたく音。

服部と浦島が泊まり込んでいる民宿。

服部と浦島が机の上にそれぞれのノートを広げ、黄色の蛍光ペンで線を引いている。

服部 (笑って)言われたんだ? お前も

浦島 ええ俺の姿見た瞬間、「中電やー死ね!」「中電なんか死んでけ」
って

服部 子供の言うことは容赦ないよな

浦島 親がそう言っとるんでしょうね

服部 にしても、どこの町でも似たようなもんだよなあ

浦島 そうなんですか

服部 そりゃ漁師町に背広姿は歓迎されないよ

浦島 ほやけど何で反対するんですかね?

問。

服部 お前は心痛めたりしないの?

浦島 何ですか? それ

服部 いや自分の町を…何て言うかある意味壊していく側になって

浦島 壊したままやないでしょ、壊して新しい町にしていくんやないで
すか

服部 やっぱ向いてるねお前、この仕事

浦島 俺今まで色んな仕事やりましたけど、今が一番やりがいあります
から

服部 お前今のこの芦浜に原発ができたとして、また新しい建設予定地
に行きたいと思うの?

浦島 えっ

服部 いや交渉員で成果上げたら、多分また違つところに転勤になるんじゃないかな。わかんねえけどさ

浦島 芦浜の原発で働けるんじゃないんですか

服部 いやどうだろうね…ちょっと漁師の名簿、チェックしたところ見せて

浦島 あっはい(ノートを服部に渡す)

服部 (ノートを見ながら)こうしてみると黄色の人少なくなったよな

浦島 でもそんなに崩さなあかん人おりますけどね

服部 (ノートをめくりながら)うん? ああお前が前に言ってた九鬼っていう人が

浦島 あっその人もですけど

服部 ああこの人は反対派理事の中心人物だろ。これは濃い黄色だよな

服部、蛍光ペンをさらに重ねる。

浦島 服部さん、見づらくなりますよ

服部 (笑って)だよ

浦島 でもこないだ本部の人が今年中に決着つけられそうやって言う
とりましたよ

服部 今年中って今11月だよ、ないない

浦島 ですかね

服部 作業員長く続けているとわかるんだよ。ここからまだひと山ふた山があるんだよ

浦島 ほやから作業員ちやいますって

服部 こだわるねえ

浦島 俺らは電源立地本部の交渉員じゃないですか

服部 その肩書き気に入ってるねえ

浦島 俺ほんま服部さんには感謝してるんですよ、中電に入れてもろて
服部 でもお前ホントこれからだからな

浦島 はい

服部 伊藤さん崩さないと終わらないからね

浦島 わかってますよ

服部 まあその前に

服部、電話に近付く。

服部 今日も確実に崩せる漁師の家に行くか…(電話をかける)あっ私、中部電力電源立地本部の服部と申します…あっそうですそうです。

先日伺ったご相談の件で本日ご自宅の方に…あっはい、ありがとうございます。では風過ぎによろしくお願い致します

服部の電話中、遠慮がちに恵子が入ってくる。

恵子、服部の電話が終わるのを待って

恵子 おはようございます

二人 あっおはようございます

恵子 あのーお仲間の方がいらっしゃったんですけど

服部 あっ来ましたか

恵子 ええ上がってきてもらってもええですか？

服部 はいはい、通してください

恵子 かしこまりました

恵子、出ていく。

浦島 どんな人なんですかね？

服部 何かとにかく怖い人らしいよ

浦島 えっ

服部 うそうそ、俺も初対面だから

そこに現れたのは浜口。

浜口 あっはじめまして、県庁の地域振興課の浜口です
服部 (立ち上がって) ああ中電の服部です。でこっちは
浦島 (立ち上がって) あっ浦島です
浜口 いやー何か突然上から、この民宿に行ってきたって言われまして
服部 ああはいはい
浜口 で私は何を？

そこに恵子が再び現れる。

恵子 すいません、あのー昼ご飯の用意は三人分ですよろしいでしょうか？

服部 あっ奥さん

恵子 はい

服部 もし今からの用意でしたら、昼はいいです

恵子 そうですか

服部 昼一番で行くところが入ったので

恵子 あっかしこまりました

恵子、出て行くこととする。

服部 あっ奥さん

恵子 はい

服部 じいの民宿に泊まるようになって仕事はかびるようになってしま
たよ。携帯電話の電波って不安定なんですよね。その点、ここは固定
電話あって助かるし、二階から海見えるし、ご飯もおいしいです
恵子 あっ…(少し複雑)ありがとうございます

恵子、出さす。

服部 それじゃあ浜口さん

浜口 はい

服部 外でちよっと早い昼飯パパッと食ってから、これからのこと話
合いましうか

浜口 …ええ

浦島 浜口さんの同級生に漁師がぎょうさんおるらしいですねっ

浜口 えっ

服部 あれ？ 浜口さんホントに何も聞いてないんですか

浜口 中電さんといっしょに仕事してっかってだけ言われたんですけど、
察してはいますけど

服部 けど？

浜口 いやちよっと何かびっくりというか

服部 そりゃそうですよね

服部と浦島の後に続いて、とまどいながら浜口も出ていく。

場所は古和浦にある干物加工工場の休憩所になる。

ゆかり、眠そうな表情で下手から作業服姿のまま現れて、
舞台の中央の段差に座る。

直美 N (日記)家族が壊れてから何にも書きたくなくて、しぼりほっ
たらかしにしていると間に11月の終わりになった。最近
は干物加工の工場でお母ちゃんのことを考えながら、魚の干物を干している。

直美がゆかりと同じ作業服姿で浮かぬ表情をして現れる。

ゆかり もう昼ご飯食べたん？

直美 いやまだやけど

ゆかり 何や？ パッとせん顔して

直美、少し距離を置いてゆかりの横に座る。

ゆかり お母ちゃんのことか？

直美 うん

ゆかり (明るく) もうあきらめたら？

直美 何でそんなこと言うの？

ゆかり じゃあないやん、出て行ったもんは

直美 そうやけど

ゆかり ほんなら何て言うて欲しいんさ

直美 …

ゆかり いっしょにおってもケンカばかりしとったんやろ？

直美 それはそうやけど

ゆかり でもどこに行ったかわからんわけやないし、電話もかかってくるんやろ？

直美 うん

ゆかり 決着つくまではそんな感じやに

直美 ええっ！

ゆかり ええっ！って何が？

直美 そんないつまで続くかわからんやん

ゆかり わからんな

直美 …

ゆかり (立って大きく伸びをしながら)…あぁー

間。

直美 最近、デモとか反対集会に行っても何かお母ちゃんのこと考えとってあたし何しとんのやろって思ってる

ゆかり …あんたは反対なんやんひっ？

直美 そうそうや

ゆかり 原発できていらんのやんな？

直美 いらんや

ゆかり ああ良かった。一瞬焦ったわ

直美 でもあたし…変な話するけど

ゆかり 何？

直美 前にな、あたしあの人に原発できやんと俺との結婚と、どっち

取るって言われて、結婚って言った人やからな

ゆかり …

直美 あたしそういうところあるもんで

間。

直美 お父ちゃんとかゆかりちゃんみたいに何かを犠牲にしてまで貴
ける人とちゃうから

ゆかり あんた結局何が言いたいん？

直美 何がって

ゆかり お母ちゃんは決着ついたら帰ってくるって言うて錦に行った
んやろ？

直美 うん

ゆかり ほんなら、はよ撤回させたらええだけやん

直美 そやけど

ゆかり ずっとこんな状況が続くって思ってるからおかしくなるんや

直美 うん

ゆかり こないだの集会でもみんな言うってたけど、これからは古和だ
けじゃなくて南島町いや三重県全体にもっと反対の輪を広げていく
活動を考えやんと

直美 …(ゆかりをじっと見る)

ゆかり 直美、賛成しとるんはお金に狂わされた漁師なんやに、普通の

町の人は反対しとる人の方が圧倒的に多いんやに

直美 うんわかっとる、それは

ゆかり はよ撤回させれるように頑張るしかないやん

直美 何で何十年も反対しとる人らって、ブシへの??

ゆかり 何でやる…やっぱり親が必死で闘ってきとるんを見とるから
ちゃう

直美 お父ちゃんとゆかりちゃんはそうなんやろな

ゆかり あとうちの場合は死んだだんなの姿も見てきとるぞわ

直美 濃いっことやな

ゆかり 何さその言い方

直美 あたしはそこまで濃くないもんな

ゆかり あんたの場合はお母ちゃんが錦出身でさ、賛成でもええんちゃ
うって思っとた人やからなあ

直美 …

ゆかり (笑って)まあある意味ハーフやもんな

直美 何さその言い方

そこに香織が私服姿で休憩所に現れる。

香織 こんにちは

ゆかり あれ? 香織ちゃん出とるん?

香織 はい、今日は昼からのシフトなんです

ゆかり あんた大丈夫なん?

香織 えっ

ゆかり 身体

香織 ああ

ゆかり うち妊娠したことないから、わからへんでさ

香織 3ヶ月ぐらいなら、みんな働いてるみたいですよ

ゆかり そうなんや

香織 ゆかりさん、もう朝早いのは慣れました?

ゆかり いや夜型人間の時代が長かったから、えらいわ

香織 そうですよ

ゆかり (立ち上がり)ほんなら調理場に戻るか…香織ちゃん次の集会、

無理せん程度にな

香織 全然大丈夫ですよ、行きますから

ゆかり (いやらしく直美に伝えるように) 香織ちゃんは頼もしいなあ

ゆかり、下手から出て行く。

香織、ゆかりの言葉はどっぴいという意味だろうかと直美を見る。

直美 あたしが煮え切らんからなんです

香織、直美の横に座る。

直美 あたし、今までまともに反対活動したことないんです

香織 そうなんだ

直美 高校の時から古和を出て行くことばかり考えとった人なんで

香織 出たことはあるの？

直美 高校出てから鳥羽の観光ホテルに就職したんですけど、長続きせんと帰ってきてそれからいくつか仕事変わって…この干物工場に働きただしてからなんです、ちょっとずつ集会とか参加したんは

香織 何がキッカケになったの？

直美 …工場の人らを見てっですかね。原発に頼らんでも町はやっていけるって思いを聞いたるうちに、誰もあきらめてないんやっってわかってからです

香織 あきらめてたんだ？

直美 はい、もうあかんようになってもしかあないんかなあって

香織 そっかあ

直美 すいません、香織さんにまた甘えたこと言うて

香織 ううん、私も本音言うつとね、この状況がいつまで続くんだろっつて思うと沈んだりするから

直美 香織さんが？

香織 だから私はいつまでも続かないっと思うようにしてる

直美 どういうことですか？

香織 今はとにかく来年の夏まで頑張ろうって思ってる

直美 来年の夏

香織 そう、この子が生まれてくるまでに決着つけられるようにって思ってる

直美 あっ…(香織のお腹を見ながら)そうですね

香織 (立ち上がり)じゃあ私もそろそろ着替えて

直美 (立ち上がり)あっあたしも戻ります

直美と香織、下手に出ていく。

古和浦湾を行き交う船のエンジン音。

場所は古和浦湾に浮かぶ養殖のいかだの上になる。

陽一郎がエサかごを抱えて現れる。

その様子はどこか浮かない表情に見える。

エサを狙う鳥が羽ばたく声。

陽一郎、しゃがみこんでハマチにエサをあげていく。

そこにひととき大きな船のエンジン音がして、洋がいかだの上に現れる。

※このシーンは海上なので、最初と船が通る時身体が揺れる芝居を取り入れてください。

陽一郎 珍しいですね

洋 おう

陽一郎 何かありました？

洋 いや今日はちょっとポイント変えて沖まで行こうとしたら、お前の姿が見えたでさ

陽一郎 沖に出てるんですか？

洋 最近、空いとる時間は沖に出て漁してるんや

陽一郎 そうですか

洋 ちょっとでも稼がんな

陽一郎 ええ

洋 沖に出て魚釣ったら、一日ナンボかにはなるぞ

陽一郎 借金返せそうですか

洋 えっ…そら返すわ。地道に働いたら、それぐらいの力ネは返せ
るぞ

陽一郎 そうですよ

洋 海さえあつたら食っていけるぞ

陽一郎 確かにそうです

間。

洋 香織さん、大丈夫か？

陽一郎 えっ

洋 お前とも嫌がらせ電話かかってきとるんやろ？

陽一郎 ああ…(苦笑して)もう慣れてきたって言うつもりですわ。あれ、
賛成派グループが中電からもらった資金でアルバイト雇ったと
らしいですね。

洋 そうやろ

陽一郎 月15万らしいですよ。香織が働いとる干物工場より全然多
いって何なんですかね

洋 そういう仕事の方が力ネになるんは腹立つな

陽一郎 洋さんとはまだあるんですか？

洋 どうやろ？ 洋子が出て行ってから、もう夜の10時以降は電話の
線抜いとるぞ

陽一郎 奥さん、錦から帰ってきそうですか？

洋 (苦笑して)さあ決着つくまで帰ってこようんと思うけどな

陽一郎 ほんまいつまで続くんですかね？

洋 えっ

陽一郎 あっすいません、変な言い方して

間。

船が通りすぎる音。

その音に合わせて、洋と陽一郎の身体が少し揺れる。

洋 いつまでって、そら俺らが撤回させるまでやろ

陽一郎 …

洋 子供のことか？

陽一郎 はい

洋 そやな

陽一郎 いや子供できた今になって…

洋 まあ不安やろな

陽一郎 直美ちゃんの時はどうな感じやったんですか？

洋 あいつが生まれた頃はまだ古和の漁師らはほとんど反対やったから、何の不安もなかったわ

陽一郎 洋さん

洋 何や

陽一郎 洋さんは今みたいな状況で直美ちゃんが出来たとしても、おんなじ気持ちでおれましたか？

洋 …うん、おれたと思う

陽一郎、しゃがみ込んで自分に言い聞かせるように何回かうなづいている。

陽一郎 すいません、やらしい聞き方して

洋 九鬼、お前迷っとるんか？

陽一郎 何ですの！ 俺と香織は洋さんにトロトンっついでいますよ

洋 …

陽一郎 香織も鬨う言つて古和に来てくれたんですから

洋 ええ嫁さんつかまえたな

陽一郎 洋さんが紹介してくれたんやないですか

洋 そのあとはお前の熱意やったんちゃうんか

陽一郎 …何か今でも関東の漁師らと交流あるんはいいですね

洋 まあ若い頃、色んな港に行っとったからな

陽一郎 俺、このハマチ出荷したら、来年は育てるの少なめにしてエサ代の出費おさえますわ

洋 そやな、まずはお互いエサ代の借金返さんとな

陽一郎、立ち上がって

陽一郎 俺も今から沖に出ますわ

洋 えっ

陽一郎 もう空いとる時間もったいないですしね

陽一郎、出ていく。

洋 …(陽一郎の気持ちを感じている)

陽一郎の船が出て行ったエンジン音。

洋、音の方向に目をやりそのまま出ていく。

照明、夕方に変わっていく。

ドアがガラガラ開く音。

場所は伊藤家になる。

直美が帰ってくる。続いて、ゆかりが帰ってくる。

ゆかり お母ちゃん帰ってきてへんか？

直美、辺りを見渡して

直美 うん

ゆかり あれ？ お兄ちゃんもおらんの？

直美 うん、最近暗なるまで沖に出とるから

ゆかり へえー頑張るなあ

直美、その場に寝転がる。

ゆかり (笑って)何してん？

直美 ああー今日はようさん魚干したわ…あっそうや

直美、起き上がりいったん舞台から消える。

すぐに一枚のハガキを手に戻ってくる。

直美 (ハガキをゆかりに手渡して)これ

ゆかり …(ハガキを見て)へえー

直美 なっ？ すじいやる

ゆかり 滋賀まで届いたとはビックリやな

直美 うん、届いたハガキの中で最長距離やわ

ゆかり ほやけど、これ何か湿っとるやん

直美 うん、なかなか見つからへんかったんやろな

ゆかり (読む)放射能がここまで飛んでくることがわかりました。私た

ちは何もできませんが、みなさん頑張ってください…何や？ これ

直美 えっ

ゆかり めっちゃ人ごとやん

直美 まあそうやけど

ゆかり そらそういうもんか

直美 でももし何かあったら、滋賀の人も危ないってわかっただけでも

意味あったんかなって

ゆかり まあな

直美 風船、大阪までは届いてないんかな？

ゆかり 届いとる届いとる、そのうちもっと湿ったハガキ届くさ

直美 でもさ

ゆかり うん？

直美 大阪どころか全国に風船届いたら、あたしだけの問題じゃなくなるのにな

ゆかり それが理想やけどな

直美 芦浜に原発できたら、全国の人もおんなじように危ないって思っ
てくれるにはどうしたらええんやろ

ゆかり まあ全国の前にはまずは三重県の人らやな

直美 そやな、送り返してくれたハガキも一番多かったし

ゆかり 何か力になりたいって書いてくれとるんも三重県の人らやろ

直美 うん、おんなじ県なのに、今芦浜がこんなことになっとるって知
らん人ほんまに多かったもんな

ゆかり ほやからうちの町のことをもっともっと三重県の人らに知
ってもらえるアイデア出していかなとな

直美 何があるやろ

ドアがガラガラ開く音。

浅尾が入ってくる。

直美 あっさっちゃん来るん早いな

ゆかり もう仕事終わったん？

浅尾 はい、今日もお客さん少なかったですから

ゆかり いやな来てもらったんはな、あんたにも何かアイデア出して
もらおうと思っとな

浅尾 …アイディア

直美 うん、次の集会までにあたしらで何か考えようかって

ゆかり ほらっ何か最近の集会って、ちよっとみんなどんよりしてるや
んか

ゆかり あっ…はい

直美 (ハガキを渡す) さっちゃん、これ見て滋賀まで届いてたって

浅尾 (受け取って)えっ…(ちょっとイヤそうに)これ何かめっちゃ湿っ
とるやん

浅尾、ハガキを放るように置く。

直美 …(反射的に浅尾の顔を見る)

ゆかり いやほんでな、今まで返ってきたハガキってほとんど三重県か
らやんか

浅尾 …

ゆかり うちらさっきな、まず三重県の人らに反対の輪を広げていけた
らなって話しとったんや

浅尾 ああ…はい

ゆかり 何かええアイデア、あなたの頭からパッと花のように咲けへ
んかな?

浅尾 …

ゆかり まあとにかく何でも思いつくじやないか

浅尾 (おえぎって)いやちよっと思いつかないですね

変な間。

浅尾、直美とゆかりをめっくら交互に見る。

ゆかり えっ何?

浅尾 あたし、もう次の反対集会は参加すんのやめます

ゆかり えっ

浅尾 ほやで賛成に回らうと思っと思っです

直美 えっ!

浅尾 …(下を向く)

直美 さっちゃんごじごじじやないか

浅尾 …

直美 えっ何でなん?

浅尾 何でって、もうこのままやったら商売やっていけへんから
直美 ……

浅尾 そら原発できるんはイヤやけど、その前に生活があるから

直美、ゆかりを見る。

ゆかりは力が抜けて浅尾を呆然と見ている。

浅尾 ゆかりさんみたいにいっただん店閉めて違う仕事しよかって思っ
たりもしましたけど、あたしはやっぱり美容師続けていきたいし
ゆかり ……

浅尾 次の集会までには言わなあかんと思っと思って

ゆかり ……

浅尾 すいません

ゆかり (裏腹に)うん、それでええんちゃうかな、あんたみたいな有能
な美容師が仕事できへんのはもったいないしな

直美 ゆかりちゃん何言う тонн、そんな止めなあかんて
ゆかり どうやって止めるんさ。そういふこと言われたら、うちらびん
することまできへんやろ

直美 でもさっちゃん、気持ちちは反対なんやろ？

浅尾 ……

直美 ほんなら、あと一年いっしょに頑張ることはできへん？

浅尾 えっ

直美 ずっと反対していくのはシンドイってことやろ？ そらあたし
も全然立場ちゃうけど、それはいっしょやから。ほやからとにかく来
年だけ

浅尾 そんな一年ぐらいでどうにかなる問題ちゃうやろ

直美 いやそうかも知れんけど、撤回させる何かええアイディアみんな
で考えてや

浅尾 何かって…：そんなんすべ見つかったら苦労せんわ。この町の人は
はあたしとおんなじ年ぐらい、ずっと中電と闘ってるんやで

直美 うん

浅尾 そんなであたしもできる限りのことはやってきたつもりやわ

直美 知ってるよ

浅尾 あんたみたいに最近急に反対活動し出したわけとちゃうんじゃ

直美 …

浅尾 ごめん、あたしはもう無理や

浅尾、出て行く。

直美、どうしていいかわからず下を向く。

ゆかり、その姿を見て寝転がる。

ゆかり (カのない声で) そら賛成に回ったら、またお客さん戻ってくる
やろうしな

直美 …

ゆかり うちは自分から賛成のもんを追い出したけど、あの子の場合は
賛成派グループが結託して店つぶしにかかったんやでな

直美 うん

ゆかり 女一人で商売していくくんは大変なんさ

直美 …(ハガキを置いて) ゆかりちゃんも賛成に回ってもええかなくて
思ったことあるん??

ゆかり …

直美 ごめん

ゆかり (立ち上がって) 帰るわ

直美 えっ

ゆかり 何かここにいたら、とびんよひつてへんから

ゆかり、下手から出て行く。

直美、湿ったハガキを手にして、じっと見つめている。

そこに電話が鳴って一回で切れる。

その後、すぐに電話が鳴る。

直美、すばやく立ち上がって電話を取りに行く。

直美 あっお母ちゃん…うん、この鳴らし方してくれたら安心して取れるわ…あっうんまあ元気やで

ドアがガラガラ開く音。

直美 あっちょっと誰か来たから、一回切るわ

直美、電話を切る。

そこに陽一郎が飛び込んでくる。

陽一郎 あっ直美ちゃん

直美 あっはい

陽一郎 洋さんは？

直美 まだ帰ってきとら入んですけど

陽一郎 えっ

直美 どうしたんですか？

陽一郎 さっき無線で組合から連絡あって

直美 はい

陽一郎 中電が古和と錦の組合に海洋調査を申し入れたんや

直美 海洋調査？

陽一郎 ああうん、それを受け入れてしまうと、もう原発の建設が始まってしまうってことさ

直美 えっ！

陽一郎 錦はもう受け入れるみたいやから、古和が受け入れたらもう終わりやで

直美 でも受け入れんかったらええんですよね？

陽一郎 いや今古和の組合は賛成のものが多いから、総会開かれたら終わってしまうわ

直美 総会っていつあるんですか？

陽一郎 二週間後

そこに勝が急いで入ってくる。

勝 ちょっとすみません！

直美 えっ

勝 洋さんが

直美 はい

勝 …洋さんが船着き場で暴力ふるわれたんです

直美・陽一郎 (驚いて)えっ！

直美 今どこにおるんですか？

勝 さっき救急車を呼んだとこで

そこに電話が鳴る。

直美 …(洋子からの電話でない)とわかる

電話鳴り続ける。

陽一郎 直美ちゃん電話

直美、嫌がらせ電話かなと思いつつも電話を取る。

直美 はい伊藤です…もしもし…いつまでこんなこと続けるんですか
(切らわれてしまっ)

直美、電話を置いた後

直美 …あたし病院行ってきます

直美、走っていく。

暗転。

四場 12月14日～15日

直美N (日記)昭和55年6月21日 土曜日。晴れ。今から寝るよじ。
今日は学校が終わってから、錦のおじいちゃん家になぎまついっしょ
に来てる。いよいよ明日や、明日がほんま待ち遠しい。

明転。

夕方。波の音。

場所は古和浦と錦にまたがる芦浜海岸。

直美が砂浜に座って昔の日記を読んでいる。

直美N (日記) 明日は早起きして芦浜でウミガメを見るんや…

そこに洋子が下手手前から現れる。

洋子 あんまり長いことおられへんで

直美 うん

洋子 漁師さんに船出すん待ってもらってるから

直美 ごめん、わがまま言っつて

洋子 芦浜に何か用事あったんか？

直美 うん、何か久しぶりに来たかっただけ

洋子 (直美の横に座って)何か面白いこと書いてたか？

直美 (苦笑して) うん、お母ちゃんもっ見たんやろ？

洋子 人の日記帳なんか勝手に見るかさ…それあんたが10才ぐらいの時か

直美 うん…初めて買おてもろた日記帳

洋子 そやったかん、そやけどよう思い出したな

直美 何か芦浜のこと考えとったらハッと思い出して、めっちゃ読みたくなっただんさ

洋子 電話かかってきてから、おじいちゃんと家の中探したんやで

直美 ありがとう…(苦笑しながら)日記帳を渡してめっちゃ明日が待ち遠しいって書いたあるわ

洋子 (目を通して) あああんたがここにウミガメ見に行った時のことか
直美 うん、ほんま残っとって良かった

間。

洋子 直美

直美 何？

洋子 お父ちゃん元気にしてる？

直美 …うん

洋子 ほんなら襲われたりしてへんのやな？

直美 うん

洋子 まあそやったらええけど

直美 お母ちゃん、明日で終わってしまうんかな

洋子 ああ海洋調査のことか。錦は受け入れるみたいやけど、古和もそうなるみたいやな

直美 うん、明日の総会開かせたら終わりやって、みんな言うってた

洋子 ほやけど明日で決着ついたら、お父ちゃんのこと心配せんでええようになる

直美 そうやけど、明日で終わったらお父ちゃんどうなるんやろ

洋子 どうなるって？

直美 そうやってずっと思ってきた気持ちとか、どこに行くんやろ

洋子 そうやな

直美 そんなん三十年も反対してきたのに

洋子 ほんまやな…うちが古和に嫁行ってからずっとやもんな

直美 (悲しくなる)明日が来るん怖い

洋子 :(直美の肩を抱き寄せぬ)

直美 お母ちゃん、お父ちゃんを助けたって

洋子 うちが今さらそんなことするんおかしいやろ

直美 そんなこと

洋子 助けるんはうちやなくて、あんたやろ

直美 :

洋子 直美はそんだけお父ちゃんの気持ちわかってるんやから

直美 ほやけど、あたし何の役にもたたんから。ほんま言ったらこれが

ら古和に帰るんも怖いもん

洋子 ほんなら錦に来るか

直美 いやそれはやめとく

間。

洋子 どうする? ほちほち行かんと漁師さん怒ってへんやべ

直美 あたしもうちよっとここにゐる

洋子 そんなんどうやって帰るんや?!

直美 山越えて歩いて帰るから

洋子 山って、あんた一時間はかかるに

直美 でも今ちよっと何か色々整理つかへんから

洋子 :

直美 ごめん

洋子 ほんならお母ちゃん、漁師さんにもうちよっと待ってもらひんや

に頼んでくるわ

直美 いやお母ちゃんほんまにええから…今日は錦から来てへんわてめ

りがとう

洋子 …直美、気づけて帰りや

洋子、下手手前に出て行く

直美、再び日記を開き、余白に日記を書き始める。

直美N (日記) 1994年12月14日。今日は日記を夕方に書く。しかも14年前の日記帳に書く。今、私は古和浦と錦にまたがる芦浜におる。ここに原発が建つかもと知った時、まだよう意味がわからなかった…

直美は書き続ける。

舞台奥下手。

伊藤家。

電話が鳴る音。

下手奥から洋が脇腹をおさえながら電話を取りに行く。

その後、ゆかりが下手から走ってくる。

ゆかり、電話を取る前に切れてしまう。

ゆかり こんな時に携帯電話欲しいなって思うな。あれって誰からかってきたか、わかるんやろ

洋 何やお前、何かあったんか？

ゆかり いや直美に今日のこと…あれ？ 直美は

洋 まだ工場とちやうか

ゆかり 今日はあの子、昼で終わるシフトやったで

洋 …

ゆかり (笑って)まさか錦に行ったんちやうやろな？

洋 そうかもな

ゆかり えっ

洋 昨日の夜、あいつに最後まで反対できへのやったら、もう錦に行っ

たらええやないかって言うたんや

ゆかり 最後まで？

洋 明日の総会阻止するために組合前で男連中は人間バリケード張るやろ

ゆかり あっうん

洋 あいつ、俺にそれだけはやめてくれって言うからさ

ゆかり そら怪我しとるからやろ

洋 そんなん関係ないわ

ゆかり いやそれはうちも思ってたんさ。それにそんなことしたらまたお兄ちゃん狙われるかも知れへんし

電話が鳴る。

ゆかり 直美ちゃん

洋 あっ俺が出るわ…(電話を取る)はい…おおー…えっ今から？ …明日にかかわることなんやな…うん、わかった

洋、電話を置く。

ゆかり 誰？

洋 浜口、県庁の

ゆかり ああお兄ちゃんと同級生の

洋 話あるらしい

ゆかり 何の話？

洋 何かあいつなりに明日の総会のこと俺らの力になってくれるらしいわ

ゆかり へえーそうなんや

洋 あいつも古和を守りたいんやろ。あっほんでゆかり

ゆかり 何？

洋 浜口が話聞きたい人おったら呼んでくれって言うところだから、お前

いっつも集会しとる女の人ら呼んできてくれ

ゆかり えっそうなん？

洋 あの美容師の子とかに声かけてくれ

ゆかり あっ…うん

洋 7時頃に来るみたいや

ゆかり ほんなら、うちそれまで家に帰って、バリケード張る男の人らのおにぎりとかおでんの用意手伝ってくるわ

洋 ああ助かる…ゆかり今日は寝られへんかも知れんぞ

ゆかり わかってる。夜食作ったらちよっと仮眠しとくわ

洋 うんそうしとけ。俺はこの後、組合前の様子見に行ってくるわ

ゆかり うん…(出て行きかけて立ち止まる)お兄ちゃん

洋 何や？

ゆかり もし明日で終わっても、うちら頑張ったよな？

洋 はあ？

ゆかり いやごめん、今はナシで

ゆかり、下手奥から出て行く。

洋、脇腹が痛いのか横になる。

舞台奥上手。

古和浦のどこかの民宿の一室。

服部、窓から外を眺めるしぐさをしている。

そこに浜口が何か思いつめた表情で現れる。

服部 御船さんの民宿の方が景色良かったですよね？

浜口 …ええ

服部 (笑って)でもまあ私の仕事は遊牧民みたいなもんですからね

浜口 …

服部 (振り返り)その後つながりました？

浜口 ああ…ちよっき

服部 大丈夫でした？

浜口 ええ、7時頃に行くと言いました

服部 さすが浜口さん！

浜口 でも服部さん、私中電さんがいっしょに行くってこと伝えられなかったんですけど

服部 ああですから、それは言わなくて大丈夫です。浜口さんには先方の扉を開けていただけたらよろしいので

浜口 …

服部 緊張されてますか？

浜口 ええこういうのは初めてやもんで、やっぱりそうなりますわね

服部 でも浜口さんの考えは賛成なんですよ？

浜口 ええ…でも津の県庁に行くまでは反対だったので

服部 まあ離れてしまったら、そうなるんでしょうね

浜口 こないだ県庁の同僚にお前のしとることは地域振興課やなくて

地域破壊課とちゃうかって言われましたよ

服部 この仕事に関わってない人の言うことなんか、全然気にされなくていいですよ

浜口 …今日浦島くんは？

服部 あいつは今日出張に行っていて夜には戻ってきます…びっくりするでしょうね。真っ黄色の伊藤さんのところに行くって言ったら

浜口 (窓を見て)伊藤んとこの家、ここからやとびこ行くんやったかな

服部 大丈夫です、私はこの町の地理は完璧に頭入ってますから

浜口 ああもう私より詳しいんでしょうね

服部 じゃあちよっと早い晩飯、食べに行きましょっか？

浜口 あっそっですね

服部と浜口、出て行く。

勝と恵子、家にはまだ上がらずに

恵子 こんにちは

洋 えっ

洋、起き上がる。

恵子 御船です…少しお話させてもらってもええでしゅうか？

洋 俺を賛成に誘いに来たんか

勝 いえそつういふことではないんです

恵子 うちら、どうしても洋さんに伝えたいことがあるんです

洋 …わかった

勝と恵子が遠慮気味に下手奥から家へ上がってくる。

恵子 すいません、うちらがもう気安くここには来れへんのですけど

洋 …(恵子と勝を見る)

恵子 あっ洋さん、お一人ですか？

洋 ああうん

恵子 (勝に)ごうめん。

勝 いや洋さんいたらそれでいいだろ

恵子 まあそやな

勝 洋さん、その後身体の具合は？

洋 ああこないだコルセット取れて、もう何ともないわ

恵子 ああ良かったです

洋 あん時は助けてくれてすまんかったな

勝 (食い気味に)いえいえ、そつういふのではないんです

洋 えっ

勝 私…知っていたんです

洋 何を？

勝 洋さんを襲撃する計画を賛成派から耳にしていたんです

恵子 この人、そんなこと聞いたのに洋さん助けること、あの日の襲撃直前まで迷ったのだったらいいんです

勝 本当にすみませんでした！

間

勝 あの一私たち古和を離れることにしました

洋 えっ

恵子 今さらなんですけど、私ら後悔しとるんです

勝 それもお金もらった後なんで、調子いい話なんですけど

恵子 あっでも…お金はもう返したんです

勝 そんな問題じゃないよ

恵子 (小声で)わかつてるよ

洋 別にええんちゃうか

恵子 えっ

洋 戻ってきたんやろ？ ギリギリのところで

勝 いえ一度洋さんを見捨てた人間がこの町に住むことはもうできませんから

洋 どこに行くつもりやっ？

恵子 まだ決めてないんですけど…虫のええ話なんですけど、この人がやっぱり港町がええなって

勝 (小声で)お前もそう言うってただろ

洋 またそこでも原発建てるぞって言うてきたりしてなっ

恵子 そういうもんかも知れませぬ

洋 うん？

恵子 いや…今度こそお世話になった人を裏切るようなことしたらあかんなと思います

間。

恵子 (立ち上がった)ほんなら私らはこれです…洋子さんと直美ちゃんに
よろしくお伝えください

勝も頭を下げた後、ゆっくりと立ち上がる。

洋 勝

勝 :

洋 九鬼んとこ、子供できたんや

勝 ああそうなんですか

洋 ほやからあいっ言っつたぞ、今やったら勝の気持ちわかるような気がするって

勝 いえいえ…私はただカネが欲しかっただけですよ

恵子 …(洋に向かって深く頭を下げる)

勝と恵子、静かに下手奥から去っていく。

洋、ひとつ大きく息を吐き出して脇腹を押さえどじりか

(古和浦組合前の状況)に出かけていく。

直美、日記を書き続けている。

浦島、下手奥から現れる。

浦島、立ち止まって直美に気付く

浦島 えっ

直美 (振り向く)…何で!

浦島 (びっくりにして)いや直美ちゃんこそ、何でこんなことおるん?

直美 …(日記を閉じ)

浦島 ここまでどうやって来たん? まさか山道歩いてきたん?

直美 お母ちゃんの知り合いの漁師に送ってきてもらった

浦島、ゆっくり歩いてきて直美に近付いてくる。

直美、背広姿の浦島を見ている。

浦島 俺いつやったか、一回古和で直美ちゃんの姿見かけたんやけど

直美 えっ

浦島 背広姿やったからわからなかったか

直美 うそ

浦島 うん、俺中電の社員になったんさ

直美 …

浦島 誰かから聞いてなかった？

直美 …

浦島 洋さんは何回も船着き場で俺のこと見とったはずやけどな

直美 …そんなん全然知らなかった

間。

直美 どこまでが決まっとったことなん？

浦島 どこまで？

直美 最初からそういうことも決まっとったん？

浦島 そういうこと？

直美 中電に入ること

浦島 …いやどれも最初から決まってるんかなかったで

直美 えっ

浦島 直美ちゃんのことも

直美 そんなことないやろ

浦島 いやほんまに最初、初めて浜好食堂で会った時は知らなかったん

やで

直美 何を

浦島 洋さんの娘ってことな

直美 別にそんな時のこと言ってるないって

浦島 いやほんまやで、ずっと漁師しとったわけやないし、俺が養殖や

り出した頃、直美ちゃん古和におらんかったやろ

直美 ほんならいつからあたしをダメそうとしたん？

浦島 …

直美 あたしに付き合おうって言うてきた時から？

浦島 ダマすって

直美 そうやる？ あたしに近付いてお父ちゃんのことを変えさせよう、大金もらおうと思っとったんやろ

浦島 …

直美 あたしはほんまにあの頃、原発のことを忘れるべからい浦島さんとのこと考えとった

浦島 原発ができることが決まった後に出会えたら良かったんかな

直美 今そんな話してないよ

浦島 …

直美 浦島さんはここで何してるん？

浦島 何しとるって、この芦浜海岸は中電の土地やから、この奥に作業小屋もあるんや

直美 作業小屋？

浦島 うん、漁師やめた賛成派の人らがここに原発建てるため木切ったり道路舗装したりの仕事しとるんや。俺はその監視にな

直美 毎日来とるん？

浦島 いや芦浜は今日たまたまやけど、普段は錦に中電の事務所があるから、俺は毎日船で古和から組合員の状況を報告に来とるんや

直美 状況

浦島 反対派漁師が賛成に回っていく状況やわな

直美 えっ作業員をやってるってこと？

浦島 いや交渉員や

直美 …

浦島 また今から古和に帰って仕事や

直美 …

浦島 まだ帰らへんの？

直美 …

浦島 えっほんまに何しとるん？ じゃなとじで

直美 何でそんなことするん？

浦島 えっ

直美 浦島さん、自分が生まれた町なんちゃうん？

浦島 えっどうしたん？

直美 おかしいやん、そんな

浦島 何がおかしいん？ えっ直美ちゃん俺が賛成って知ったやろ？

直美 知ったけど…そこまでする人やったなんて信じられへん

浦島 そこまでって？ …直美ちゃんも古和から出て行きたいって言うったやん

直美 全然意味ちゃう

浦島 おんなじようなもんやと思うけどな、古和の町には未来がないって思っとるところは

直美 今はそんなこと思っとらん

浦島 あれ？ 直美ちゃん中立派やったやん

直美 それはあの時までの話や

浦島 ほんなら、今日みたいな日にこんなところにおいたらあかんのちゃうん？

直美 …

浦島 あんな、俺のやっとする仕事は古和を新しい町にすることなんやで
直美 そんなにお金で狂わしとるだけやん

浦島 狂わしたんは古和の町やろ

直美 何でさ

浦島 町が貧しいからあかんのさ

直美 貧しいことはあかんことなん？

浦島 直美ちゃん、貧しいから古和は中電に狙われたんやで

直美 …

浦島 この芦浜に人がいっぱいおったら、中電はそんなことせえへんやろ

直美 そんなんせえへんって、何で中電ありきなん？

浦島 しゃあないやん

直美 …

浦島 俺らはそういう町で生まれたんやから

直美 人が少ないから貧しいからってだけで、何でそんなことされな
かんの

浦島 でも中電もただ町を壊そうとしとるわけとちゃうやろ

直美 わかってるよ

浦島 原発できたら古和も錦の町も人口増えるし町に交付金も入るし、
人がおらんココから東海地方の人らに電気を供給できるし…何もお
かしいことないやん

直美 あたしもそう思った時はあった

浦島 そうやろ

直美 (口帳に目移して)何で忘れてったんやろ

浦島 えっ

直美 子供の頃、初めて原発のこと聞かされた時に思ったことを

浦島の携帯電話が鳴る。

浦島 はい…あっまだ芦浜なんです…えっほんまですか！…あっもち
ろん行きます…はいわかりました

直美 …

浦島 直美ちゃん、今から洋さんとここに交渉員として行くことになった
わ

直美 えっ

浦島 まあそういうことになった

直美 …

浦島 船で古和まで行くけど乗ってんか？

直美 何でいっしょに乗らなあかんのや

浦島 …山越えは大変やで。どっちにしろ古和まで帰るんやろ？

直美 あたし走って帰るから

直美、下手奥に向かって走って行く。

浦島、下手奥を見上げて下手手前から出て行く。
照明、夜に変わっていく。

直美N (日記)もし原発が爆発したら、この町の人はみんな死ぬって言うてた。私はあの時芦浜にいた大人に何でそんな危ないもんを私らの町に作るんって聞いたたら、何でやるなって何か苦い顔してそう言うてた。

直美、山道を走っている。

ゆかりが入ってくる。

舞台奥中央。

伊藤家。

ドアがガラガラ開く音。

そこに直美が息を切らしながら入ってくる。

ゆかり あんたどこ行っとったん！

直美 中電の人らは？

ゆかり えっ？

直美 今から家に来るぞ

ゆかり 何言っとん？

香織と浅尾が入ってくる。

浅尾 (遠慮気味に)こんばんは

直美 さっちゃん

ゆかり えっ香織ちゃんが誘ってくれたん

香織 ここに来る途中、店の中覗いたら

ゆかり うん

香織 一人でたたずんでいたの思い切って声かけたんです

ゆかり 一人で？

浅尾 (笑って)全然お客さん来うへんから

直美・ゆかり えっ！

浅尾 あの日洋さんが襲われたって聞いて…何かそんなことする人ら
といっしょにされんのはイヤやなって

直美 ほんなら

浅尾 いやほやから言うて反対しとつても何も変わらんやろし…と
かフラフラ思っとるうちに今日になってった

香織 それで私が明日まで頑張りませんか

浅尾 直美ちゃんが言うとった来年の夏までは待てへんけど、明日まで
ならあたしもできる限りのことはさせてもらおうって

ゆかり 十分やん！ うちも明日までは頑張るで

ドアがガラガラ開く音。

浜口、入ってくる。

浜口 こんばんは

ゆかり あっお兄ちゃん今ちょっと組合前の様子見に行っとって、まだ
帰ってきとらへんのですけど

浜口 あっちょっと早かったかな？

ゆかり いやもう入ってください

浜口 ちょっと中電さんも呼んどるんやけど

ゆかり えっ…(直美を見る)

浜口 あっ入ってきてください

服部、入ってくる。

続いて浦島が入ってくる。

直美と浦島、目が合う。

浜口 電源立地本部の交渉員をやっとる服部さんと浦島さんです

服部・浦島 …(みんなを見渡して神妙に頭を下げる)

浜口 いや中電さん呼んだんは、こないだの伊藤への暴力事件のお見舞いをさせて欲しいってことなんやわ

直美 お見舞い？

服部 ええ、もともと電源立地の建設計画によって、このような騒動を起こしたので私たちも心苦しい立場でして…その気持ちだけでもお伝えしよう…(バックからお見舞金を出して)

ゆかり 何しとん、そんないらんわ

浅尾 うそ、あんたらが裏で操ったんでしょ？

服部 いえ、私たちはそのようなことを指示したりすることは一切ありません

香織 嫌がらせ電話もですか？

服部 ええもちろんそうです

浅尾 指示せんでも見て見ぬフリはしとったってことですよな？

ドアがガラガラ開く音。

洋と陽一郎が戻ってくる。

陽一郎 (浦島を見て)えっ

洋 何でお前がおるんや

浜口 あっ俺が連れてきたんや。何かこないだのお前への暴力事件のお見舞いをしたいからって

洋 何やそれ…おい出て行ってくれ

浜口 あっ伊藤、ちょっと待ってくれ

洋 えっ

浜口 ちょっとその人らにもおってもらって、聞いて欲しいことがあるんや

洋 何をや

浜口 単刀直入に言うわ…伊藤、明日の総会を阻止せんといて欲しいんやわ

洋 …

浜口 まあ阻止されると賛成派と反対派が衝突してどうしても乱闘騒ぎになるやろうから、そうになったら警察や機動隊も出てくることになるやろ

洋 そらそうやけど、俺らにはそれしか方法ないやろ

浜口 いやそれでな…(服部を見て)夕方に町長と組合長と中電さんの副社長らが話し合って、明日の総会を開かせてもらえたら海洋調査が可決になってますぐには建設準備には入らんと約束してくれたんや

服部 はい、副社長が確約した一筆もご用意しています

ゆかり すぐには建設準備せえへんだけで結局はするんやろ??

服部 いえ仮に明日海洋調査が可決しても、私たちは住民の方の同意がなければ建設を始めないということです

洋 えっ

服部 はい、漁師だけではなくこの町の人たちの意見を尊重するということですよ

香織 それで撤回される可能性はあるんですか??

服部 可能性としてはあります

陽一郎 それ信じてええんですか??

服部 もちろんです。お互いが納得できるまで何回も話し合っ場を設けさせてもらいますので

陽一郎 何回も??

間。

陽一郎 ほんなら今とたいして変わらへんやろ。今でも町は反対の人の方が多いんやから

香織 そういうことですか

浅尾 やっぱいろいろ終わるか、わからへんのや

服部 はい、今までも三十年も費やしてきたわけですからですが、私たちは例えこの先十年かかって二十年かかって、みなさんに原発の必要性を理解してもらおうつもりです

ゆかり あんたらは何が何でも汚れた町にする気なんやな

浦島 汚れた町って何ですか

ゆかり えっ

浦島 何も汚れていかへんですよ

陽一郎 何て

浦島 何で汚れるって思うんですか

陽一郎 お前何調子に乗っとんじゃ

浦島 何で古和が変わっていくことをそんな怖がるんですか

陽一郎 怖がる？

浦島 新しい町に変わるチャンスやないですか

陽一郎 お前、町に原発できるんがどういふことかわかっとんのか

浦島 わかってますよ、ほやけど俺らみたいな貧しい町はそうでもして

いかんと終わっていくんですよ

陽一郎 …

浦島 九鬼さんもそう思っとったんちゃうんですか？

陽一郎 …

浦島 ほんまは賛成に変わるキツカケなくしただけでしょ？

陽一郎立ち上がって、浦島の胸倉をつかむ。

香織立ち上がって、止めに入る。

香織 陽一郎さん

陽一郎、香織の制止によって浦島から離れる。
間。

反対派のみんな、下を向いて何か脱力してるように見える。
直美、そうしたみんなの姿を見ている。

服部 みなさんを見ていると思います

みんな、服部を見る。

服部 私はここに来る前、違う原葬建設予定地の交渉員の仕事をやっていたんですが、当時現地にいた住民の方々も先の見えない闘いが一番つらかったと言っていましたね

間。

浅尾 (下を向いて)その町は建設されたんですか？

服部 ええ…(みんなをゆっくろと見る)

ゆかり できてもうた後は、それまでずっーと反対してた思いとかもまあ忘れてしまうもんなかなあ

服部 人が増えてお金も回っていくので、そうした思いは新しいやりがいに変わっていくんじゃないでしょうか
ゆかり …

浜口 ちょっとここで話戻したいんやけど…伊藤、明日の総会の件どうかな？ 阻止さえやめてくれたら可決しても住民の声を無視して建設は始めへんって中電さんからの提案

洋 浜口お前信じられるんか？ そんな提案

浜口 えっ

洋 中電さんの言うこと、ほんまに信じられるんかって聞いているんや

浜口 …(半信半疑)

洋 お前も確信が持てへんこと、俺らが信じられると思っとんのか
服部 では信じられるものを用意してきました

間。

服部 伊藤さんを含むみなさんが反対派から今下りしていただければ、私たちはその代償として五千万をお支払いします

浜口 (聞いてない)えっ…

服部 もし提案を受けていただけるなら、お金は代表して伊藤さんにお渡しします

浜口 服部さん

服部 ええあまり公にできるお話ではありませんが、私たちもみなさんと同じようにいつ終わるかわからない闘いをこれ以上続けたくないんです

洋 …

服部 みなさんもいつか結局は建設されるぐらいなら、本音では一日でも早く決まって欲しいと心のどこかで思われているんじゃないでしょうか？ もしそうなら今日お金を手にされることは賢明だと思いますが

間。

服部、浦島を見る。

浦島 ゆかりさんのスナック、今売りに出されてますよね？

ゆかり はあ？

浦島 お母さんから譲り受けた大事な店でしたよね？ 買い手がついたらなかなか取り戻せないですよ

ゆかり 何であんたにそんな心配されなあかんねん

浦島 浅尾さんの美容院は店の維持費を都合つけるの大変みたいです
ね？

浅尾 …(浦島を見る)

ゆかり あんたら、どこまで調べてるんや

浦島 九鬼さんともまだエサ代や船の油代の借金返せてないですよ
ね？ それにお子さんも生まれるようですし、これからのこと考えたら不安ですよね？

香織 …(ししむい)

陽一郎 …(香織を見て)俺らほんま汚いやり方するのう

浦島 何でなんですか。俺らはこういいう貧しい町に生まれたんですから、

もらってええんですよ。これは仕方ないことなんですよ

間

直美 仕方ない、なにが仕方ないさ

浦島 :

直美 ここはあんたみたいに仕方ないで終わらせてへん人らばかり
なんやで

浦島 ほやけどいつかはあきらめなあかん時があるんや

直美 あきらめへんって

浦島 (半笑いで)お前みたいな甘い奴が何言っとん

直美 : 何がおかしいん?

浦島 だってなんもわかってないやん

直美 だから何がさ

浦島 お前が思っとるんは原発が嫌なんやなくて、原発作ろうとしとる
俺が嫌なんやろ

直美 原発もあんたも嫌じゃ

浦島 (笑う)

直美 もうあんたみたいな人、ほんま古和から出て行って

浦島 何で出ていかなあかんのじゃ。俺もこの町で生まれたんやで、ほ
んでこの町に出来る原発で働くんや

直美 そんなもん永遠にできへわ

浜口、立ち上がって

浜口 服部さん、すみません

服部 はい

浜口 私、もう県庁に戻りますわ

服部 えっ だってまだ仕事が

浜口 いや、もう帰りますわ

洋 浜口、ちょっと待ってくれ、もうちょっと今の古和を見てってくれ
浜口 もう見させてもらったわ。俺の個人のこと言っていてええか。
洋 何や。

浜口 原発のせいでの町の住民同士がこんないがみ合うんがつらい
わ。ほやからはよ帰って地域振興課の人間として、古和の人間として
も県庁にちゃんとその現状を伝えわ。

洋 ありがとう

浜口 …ほな

浜口、去っていく。

服部、立ち上がって

浦島、服部の姿を見て立ち上がって

服部 では私たちも失礼します

洋 ああそうしてくれ

服部 伊藤さん、私たちの提案、明日まで返事を待ちますので

洋 …(みんなを見る)

服部 みなさん、本当にこんな長い闘いはもう終わりにさせてください
服部、深く頭を下げ去っていく。

浦島 みなさん…(みんなを見渡して)明日ほんまによろしくお願いしま
すわ

浦島、深く頭を下げ去っていく。
間。

ゆかり そらお金は欲しいわ…

浅尾 そうですよんなあ

直美 お金の話はもうええやん

洋 直美、それはちゃうぞ

直美 えっ

洋 お前とここにおる人らとは生活の仕方が全然違うんや

直美 …(みんなを見る)

洋 それはわかるやろ

直美 …うん(うつつむく)

洋、脇腹をおさえて立ち上がる。

みんな、洋の姿を見ている。

陽一郎 洋さん

洋 なんや

陽一郎 行くんですか？

洋 当たり前や、誰がバリケード作ってくれるんや。賛成派の組合員は
午前0時に総会開く可能性もあるでな、そうになったら終わりや

陽一郎 はい

洋 (笑って)ほな、行ってくるわ

洋、出て行く。

陽一郎、立ち上がる。

陽一郎 俺も洋さんについてきますわ、約束してるから

陽一郎、出て行く。
間。

ゆかり あきらめ入んって…言ったよな

直美 え。

ゆかり さっき、あんた浦島くんに

直美 うん。

ゆかり 直美は何で反対しとるん？何で仕方ないって終わらせたくないん？

直美 だって…

香織 だって、なに

直美 あたし、今日思い出したんです、最近まで忘れとったこと芦浜で

浅尾 芦浜？

ゆかり あんた芦浜に行っとったんかん？

直美 うん。腹立とったんさ、仕方ない人にされることが。だってあたしらはもし事故が起こった時は仕方ない人らうってことにされるんやろ？事故はほほ起きません。でも起きたらごめんなさいってことなんやろ？たまたま人が少ない町に生まれたってだけなのに…子供の頃あたしはこれが一番許せんことやったのに、そのうち考えることがシンドくなつて逃げることばかり考えとって、いつの間にか忘れてった

ゆかり でも正直言つと、うち五千万って聞いた時、何で反対しとるんかわからんようになったわ

間。

ドアがガラガラ開く音。

なぎさ、入ってくる。

直美 なんぞ！

なぎさ さっちゃんに知らせたいことあったから学校の仕事終わってから、急いで帰ってきた

浅尾 何？

なぎさ (ハガキを取り出して)大阪まで届いたんさ、さっちゃんのハガキ！

浅尾 うそやん

なぎさ 聞いて、それもな、うちの小学校の子が見つけたんや！

浅尾 ほんまに！

なぎさ 何かだいぶん湿ってるけど…(ハガキを渡す)

浅尾 (受け取って笑う)ほんまやな…(ハガキを読んで) あああたし頑
張らなあかんわ

直美 さっちゃんの思いが大阪まで届いたんやなあ

浅尾 …うん

香織 風船プロジェクトやって良かったですね

浅尾 (なんども頷く)

間。

後方。古和浦組合前にバリケードを作るための人が現れ始
める。

ゆかり ほな、行こか

浅尾 はい

なぎさ 行くなって組合前ですか？

ゆかり そやで、もう誰か集まとった？

なぎさ すごいことなってます、私のお父さんとお母さんも

直美 え、そうなんや

なぎさ うん

香織 私も行きます。

浅尾 だって香織さん

香織 大丈夫です！私もやれるとこまでやらせてください

ゆかり 無理したらあかんぞ

香織 はい

みんな出て行く中、直美だけ立ち止まりきびすを返す。

そして電話をかける。

直美 …あっお母ちゃん…うん古和に帰ってる…あたし今から闘って

くるから…(電話を切る)

直美、走って行く。

古和浦組合前でバリケードを張るために人がどんどん現れてくる。男性は後方に立って、女性はその男性たちを警察から守るために前方に座り込んでいく。

照明、暗くなっていく。

日付は12月15日の夜明け前。

飛び交う怒号。

直美、現れて座り込みに参加する。

人物たちの動きが止まって。

直美(日記) 1994年12月15日。

生まれて初めて大声をあげて抵抗した。賛成派、反対派、警察、機動隊の怒号が入り混じる中、私は座り込みを続けて賛成派を一人も組合の中には入れやなかった。激しく必死に抵抗しとる時、私はこの町に生まれてきた意味がわかった気がした。もう逃げへん。明日から白紙撤回の日まで今度こそ毎日日記をつける。これからはその日の出来事を思い出せるようにタイトルをつけようと思う。夜明け前、私たちは立ち上がる。

暗転。

おわり